

今、この時

島根県 大智寺 住職 彌重利久

私たちは、日常生活を送る中で、やり残したことがあれば「この続きは明日にしよう」と、先送りすることがしばしばあります。それは、明日が当たり前のように必ず来ると信じているから先送りするのでしょうか。

しかし、本当に私たちには明日という日が必ず来るのでしょうか。そのことを思い知らされた出来事がありました。それは、県外にお住まいのお檀家さんとの出来事です。そのお檀家さんは奥様を亡くされ、一人暮らしをしておられました。実家はお寺の近くにあるのですが、お檀家さんが住まいを県外に移されてからは、空き家となっていました。

しかしお墓と元の家はごちらにありますので、奥様の一周忌の法事と納骨に帰郷されました。その時に「新しい位牌を作って持ち帰るので、開眼供養をお願いしたい」と依頼を受けました。約束の日、私は到着されたお檀家さんにお茶を差し上げ和やかに談笑して、開眼供養を勤めました。そしてお盆に再会の約束をし、お別れの挨拶を交わしお見送りをしたのでした。

ところが、それから二十分ほどして一本の電話がありました。それは、先ほどお見送りをしたばかりのお檀家さんからでした。その通話は声に力がなく「少し気分が悪くなったので、車を止めて休んでいる」とのことでした。私は胸騒ぎを感じて、すぐに様子を確かめるため車で出かけました。

しばらく走ると、人里離れた峠道の路肩にお檀家さんの車を見つけました。

私が近づくと、お檀家さんはいびきを立てて眠っておられます。声をかけましたが返事がありません。ただならぬ様子に驚き、すぐに救急車を呼び、脈を計り声をかけ続けました。そして、昔少し習ったことのある心肺蘇生を必死になって試みましたが、ついに呼吸が止まり脈も止まってしまったのです。数分後に救急車が到着し、病院へ搬送されました。残念なことに、それが生前最後のお姿となりました。私は、お檀家さんとのあまりにも唐突なお別れに愕然としました。お檀家さんに、明日という日は来なかったのです。

「人の命は、草に宿った露よりも脆いものだ」とお経に示されています。命は儚いがゆえに、今を大切にしなければなりません。私たちは「明日」という日が必ず来ると約束はされていません。日々かけがえのない「この時」を、積み重ねているのです。お檀家さんとの突然の別れに、あらためてそのことを強く考えさせられました。「今すべきこと、今やらなくてはならないことを先送りにしない」そんな生き方をしたいですね。明日が必ず来るとは限らないのですから。